校注 平中物語

山田巖
水野清
木村晟
共編

洛文社

山田巖
水野清
木村晟
共編

校注

平中物語

洛文社

昭和四十五年五月二十日　印刷
昭和四十五年五月二十五日　発行

校注　平中物語

定価　九〇〇円
〒　七〇円

編者　山田巖
　　水野清
　　木村晟

発行者　野田武夫

印刷所　共同印刷株式会社

著者との協定により検印を廃す

京都市中京区西ノ京大炊御門町八番地
発行所　株式会社　洛文社
電話　京都（〇七五）463―八一〇八
振替京都三八二八番・郵便番号六〇四

凡例

一　本書は大学・短期大学などの演習用ならびに講読用のために編集したものである。

一　本文の影印・翻刻ならびに五注釈本文対校の部分は、昭和四十四年十月に刊行した「平中物語　本文と索引」（洛文社発行）に拠った。本書の原本は天下にただ一本しかないものである。本文の解読上、疑問の部分を他の写本によって照合する便宜がない。ひたすら原本の本文によってのみ解読につとめた成果が翻刻の本文である。

一　校注の部分は本来、前記同書の巻末に附して刊行される予定であったが、原稿が刊行期日に遅れたために本書の校注の部として印刷することになったものである。この校注は、本文解読の作業のために進められた研究である。この研究によって本文の解読を改めなければならない個所が生じる可能性もあるが、本文の改変は見送った。校注の部分の担当者は水野清である。

一　影印の原本は、静嘉堂文庫に秘蔵されている天下の孤本である。この貴書の閲覧影印刊行については、文庫長である旧知米山寅太郎氏のなみなみならぬ御配慮を賜わった。特に記して深甚なる謝意を表する。

一　本書には語句の索引を付けなかった。「平中物語　本文と索引」の索引の部分をじゅうぶんに活用されることを期待する。

昭和四十五年二月十一日

山田　巌

目次

凡例……山田巖
本文
〔一〕影印（静嘉堂文庫収蔵本）
〔二〕翻刻……三
〔三〕五注釈本文対校……三七
校注……二〇七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平中物語

〔二〕

翻刻

凡例

一　本文は静嘉堂文庫収蔵の原本（天下の孤本）を底本として作成した。

二　翻刻に際しては、底本に忠実であることと、読解を便ならしめることとを考慮して、次の諸点に留意した。

(1)　ページ・行数および一行の字詰めを底本に一致させた。原本およびその影印版との対校を容易ならしめるためである。

(2)　底本には句読点は一切存しないが、適当な句切りを附して分かち書きの形式をとり、通読を視覚的な見地から便ならしめた。「昭和校註竹取物語」（山田孝雄・忠雄・俊雄共編　武蔵野書院刊）を範としたものである。

(3)　底本には存しないが、会話や心中に属する部分については「　」を附し、地の文と会話文および心理描写の文との位相を明瞭ならしめた。ただし、会話が歌で始まる場合と終はる場合にはつけなかった。これは日本古典文学大系本「平中物語」（遠藤嘉基校注　岩波書店刊）に拠ったものである。

(4)　底本において誤字・脱字と考へられるものについては、その左傍に（　）をもって注記した。また衍字と考へられるものについては、その左に（衍カ）と小字で注した。

(5)　本文の右傍に、小字で、底本に存しない振り仮名をカタカナによって示し、宛て漢字をしたのは、読解を助成するためである。

(i)　懸詞の場合の宛て漢字は、その漢字の下に＜　＞にて、かかってゐることばに相当する漢字を示した。

(ii)　宛て漢字は原則として旧字体を用ゐた。古文読解にあたって、現代語の表記意識と混同させないためである。

(iii)　宛て漢字の方針としては、妄りに私意をもってすることを避け、またなるべく多く附するといふ態度をとったが、仮名文学の味はひを損ねるやうな場合は無理に宛てることはしなかった。これまた、前記「昭和校註竹取物語」を範とし、これに「平中物語」の特殊性を加味したものである。

(6)　仮名遣ひについては、すべて底本のままである。ただし、次の配慮を行なった。

(i)　仮名遣ひの誤用については、その右傍に（　）にてその正用を示した。

(ii)　変体仮名については、底本のままを示すことは活字本としての性格上、煩雑を極めるので、特に次の二点に限り底本の様相を保存し、他は通行の字体（平仮名）に改めた。即ち、

〈1〉　「ん」表記については、この仮名の表はす音（「み」「む」「も」「ん」）を、その右傍に（　）にて示した。「ん」が必ずしも(m)音を表はす場合にのみ用ゐられるかどうか検討の余地を存するからである。

〈2〉　「見」「身」などを仮名と見るべきか漢字と見るべきかについては、その字を含む語の意味によって判断することにし、漢字と判断した場合には、底本のままの字体にした。

(7)　底本には濁点は一切附してないが、本文の右傍に（　）にて、便宜上、濁音を示した。編者の理解するところにより施したが、なほ検討の余地が多い。

(8)　本文の校定に当っては、先行諸注釈を参考にしたことは勿論であ

るが、また編者独特の考え方に基づいた部分も少なからず存する。この部分に関しては校定の根拠となるべき事項を巻末の「平中物語校注」（本文校定上の覚え書き）にまとめておいた。

(9) 底本に存する漢字の字体については、すべて原本のままとしたが、著しい宛て字については、その右傍に、小字で正字を注記した。

〔例〕 石の神上　　その神當時

(10) 底本には存しないが、通読上、必要と思はれる個所に、行為の主体（潜在主語）を〔　〕にて本文中に注した。一々について検討はしたが、結果としては、概ね日本古典文学大系本「平中物語」に従ふことになった。

(11) 本文の脚部に「行」を指示する数字（5・10）を附した。

三 章段の区分については、先行諸注釈が大同であるので、一往、日本古典文学大系本「平中物語」に従った。

四 平中物語の先行諸注釈の本文の様相については、本文篇〔三〕五注釈本文対校として、〔二〕翻刻の後に掲げることにした。

〔一〕

〈一〉今いまはむ昔かし男二人ヲトコフタリして女ひとりを呼よ

はひけり先さいたち立てより言いひける男ヲトコ

は官つかさま勝さりてそのと時きのみ帝かと近ち

かう仕つかふまつりの後ちより言いひける男をとこ

は其そのお同なし帝みかとの母は后きさきの御足あ

なす末ゑにて官つかさはお劣とりけり然されと如い

か何ゝお思もひけん後のち人にそ着きにける

か所有ゝれは此このは初しめのお男とこはこの此もた

りける男ヲトコをそ甚いみしくあ仇たみて萬よろつ

のた怠い〳〵々事しきことを物ものゝおり折ことに毎みか

10

と(ど)の「なめし(無禮)」とおもほす(ほ)はかりの事(コト)を
つくりいたし(作出)つゝきこえそこなひ(聞損)
けるあいだ(間)に　このおとこ(此男)はた(將)　宮つかへ(ミヤ仕)
おは(を)くるしき事(コト)にして　たゞ(唯)せうよう(逍遙)
をのみして(爲)　衛府ふつか(衛府官)さにて　宮つかへ(ミヤ仕)も　つか(仕)
ふまつらす(ふ)といふこと(言事)といてき(出來)て　つかさとらせ(官取)
たまへは(給)　よの中(ナカ)もおもひうし(世思憂)て　「うき世(男憂)
にはまし(交)らはて(で)　ひたみち(直路)にお(行)こなひに
つき(書)て　野(ノ)にもや(山)まにも　まし(交)りなん(む)」と思(オモ)ひ
つれと(ど)　一すを(ヒトトキ(時)スカ)たに(だ)もはなたす(放)　ちゝは(父母)の

10　5

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

甚いみしくかなしくしたまふ人なれは憂う

きもこれにそ思おもひさはりぬるとき時しも

有あれ秋のこ頃ろにさへ有ありけれは太いとも物の

心細ほそう覚おほえて心こゝろひとつを慰なくさめ

佗わふるゆふ暮れに斯かく言いふ

憂男うきよ世には門かとさ鎖せりとも見えなく

に何なそも我わか身ミのいて出てかてにする爲

言いひつゝ眺なかめる居たるあ間いたに生なまい挑

とみて物ものなと言いふ人ヒトのも許とより蔦つたの

甚いみしくも紅葉ちたる葉ハに女「これは何なにとか

見ミる」とて遣おこせたりけれは斯かく言いひや遣る

10 5

〔男〕憂 名 立〈龍〉田 川 紅葉 葉
うきなのみ　たつたのかはの　もみちは〻

物 思 秋 袖 有
ものおもふ秋の　そてにそありける

〔女〕返 爲 此 友 達 集
かへしもせす　この男のともたちとん　あつ

來 言 慰 爲 成
まりきて　いひなくさめなとしけれは

酒 等 飲 宵
さけらのませけるに　よひになりにけれは

聊 氣 近 遊 思 爲
いさ〻かけちかきあそひなとして

〔男〕水〈身〉 海〈憂〉 思 和 間 今 宵
みのうみの　おもひなくまは　こよひかな

浦 立 浪 打 忘
うらにたつなみ　うちわすれつ〻

有 此 哀 遊 明
とあり　これをあはれかりてそ　あそひあ

かしける　さて　又の夜の月　よにしらす　おも

白 萬 子 面
しろきに　よろつの事おほえて　すのこに

いてゐて　そらをながめけるほとに　夜のふ

けゆけば　風はいと心ほそくふきて　くる

しきまておほえけれは　ものゝゆゑしれる

ともたちのもとに　「ねて月は見るらむ」と思ひて

いひやる

なけきつゝ　そらなるつきを　なかむれは

なみたそあまの　かはとなかるゝ

とて　やりたりけれは　かの　やりたりける

人も　たまさかにおもひて　やりたりけ

るに　やうに月見るとて　またねてそあるに

かゝるに　もてきたれは　いとをかしみて　かへしす

あ(友)天まのか(が)川は　き(君)みかな(が)涙みた(だ)の　水(ミツ)ならは(ば)
い(色)ろこ(殊)とにてや　お(落)ちた(滾)き(ぎ)るらん(む)

さて　ま(又)た　こ(異)とゝ(友)もた(だ)ち(達)とも(ど)そ(ぞ)　き(來)たりけ
る　世(ヨノナカ)中のも(物)のか(が)(語)たりと(ど)ん(も)なと(ど)(爲)していふ(言)「き(紀)の
せ(背)か(が)(川)は　き(昨)のふ(日)のふ(淵)ちそ(ぞ)　と(言)いふ(事)こ(事)とをなん(む)(得)(知)えしら
ぬ　そ(其)れか(が)(様)やうに　こ(此)のつ(官)かさ(取)とられたま(給)へる(事)こと
をそ(ぞ)　そ(其)のつ(罪)みとえ(得)しら(知)ねは(ば)　こ(此)のき(紀)のせ(背)か(が)(川)はに
なん(む)　き(來)たる」とて　き(來)たる人(ヒト)(斯)かくなん(む)

世(異友)(ヨノナカ)中の　ふ(淵)ち(瀬)せの心(ココロ)　い(今)ま丶て(で)に　き(紀)のせ(背)
か(が)(川)はをそ(ぞ)　し(知)らす(ず)(經)へにける

か(返)へし

きのせかは　我もふちせおしらねは
そわたるとやかてそこにしつめる
かゝるほとに　冬になりぬれは　いとつれ〳〵に
よのなかのうらめしきことのみおもへはく
るしきをおこなひはゆるされす「心なくさめ
に　あつまのかたへまからむ」とおやに申けれは
「なをこの正月のつかさめしにすくせそれに
ともかくもあらすはもろこしへもいませよ」
とのたまふにさはりてまちけるにそのつかさ
めしにむなしうなりぬれはおもひうし
はてゝさいはてえあるましき人のもとにいひやる

〔男〕浮〈憂〉
うき草の　みはねをたえて　なかれな
ん　なみたの川の　ゆきのまに〈
とある　を見て　「さりとん　ふとはえいきはなれ
し」とおもひて　かへし

〔女〕〔お〕遅
をくれゐて　なけかんよりは　なみた
河　我おりたゝん　まつなかるへく
かくて　まことに　このおとこ「ものいなん」と思ひ
たる氣色お見て　をや　あけくれよひ
すゑて「人のよの　はかなきをしる〈　はる
かにいなんといふは　おやをいとふか　なを　この
正月のつかさをめしをたにまて」と　せちに

5

10

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com